

エンカウンター (ENCOUNTER)

第260号

2023年12月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源先生「ガラテヤ人への手紙講解説教」より (5)

ガラテヤ書の註解書

本日の福音の内容の箇所〔ガラテヤ書第3章6-14節〕につき、2,3の註解書を読みましたが、非常に難解を極めております。10節ほどですが、私は註解書を読み切れませんでした。いつもでしたら、全部読めますが、今週は半分ほどしか読めませんでした。これによって如何に問題が多いか、また、重大な場所であるかが分かります。私は、黒崎幸吉先生の日本文の註解書、内村鑑三先生のガラテヤ書講義、それからルターのガラテヤ書註解（黒崎幸吉訳）の3つだけは全部読むことが出来ました。これらの註解書を通して、私が味わっている信仰について本日の注解を致したいと思います。

宗教の中心

アブラハムが信者として祝福を受けた、という言葉は創世記から引かれたものですが、福音を信じて救われるということは、アブラハムがすでに実験しているということでもあります。聖書にはこう書いてある、と言う。福音の信仰の態度は、実にアブラハムで始まっております。私が思いますのに、私は他の宗教のことは知りませんが、ちょっと仏教浄土門をかじって来ましたが、結局、人は自分の力によってではなくして、この信仰によって救われる、即ち、神から提供されている救いを信じて救われる、ということが宗教の中心になっているのではないかと思います。私は、禅宗についてあまり知りませんが、やはり自分を仏に投げかける、というところに宗教の本質があるような気がします。古今東西、宗教の根底は、神を信じることに尽きるように思います。パウロは旧約聖書の文句を引いて、これは私の発明ではなく、既にアブラハムにおいて実験されたことであると、行っております。

信仰は神の約束を信じること

「義人は信仰によって生きる」という有名な言葉が旧約聖書（ハバクク書）にあります。ご存じの通り、「信仰による」という字は、「義人が生きる」という字の間に入っています。ですから、「信仰による義人は生きる」とも読めますし、「義人は信仰によって生きる」とも読めます。…内村先生は、「信仰による義人は信仰によって生きる」と訳すれば、本当の意味になる、と言われました。私も先生にならしまして、そう訳したらよいと思います。即ち、「信仰による」を義人の形容の言葉としてもよいし、「生きる」という動詞にかける言葉としても、どちらでもよい。そうですから内村先生の説明は分かりやすいと思います。

律法・道徳は行いを要求しています。自分によっています。信仰は、神の約束を信じることであります。神は、永遠の生命を賜物として与える、提供しているという内容を持っています。従って、福音というものは、神のお差出しを受けることであります。受けることは人間側の状態と言えますけれども、パウロはエペソ書に於いて「信仰は神の働きによる」と書きました。パウロの言葉に従えば、「やる」というのに対して、「受ける」という心が起こって来るといふ。パウロは、信仰は神の働きと見ておりますから、ですから、我々は信仰を自慢することは出来ません。神の賜物が我々に移ったものです。

キリスト教の中心は、神の子となり、永遠の生命を持つこと

「信じる」と言って、何を信じているのですか。キリストを道徳の手本として、善を行なうのであれば、何もキリスト教である必要はありません。キリスト教の中心は、神の子となり、永遠の生命を持つことにあります。聖書には、これが繰り返し書かれています。永遠の生命を持つ、これがヨハネ伝の主張です。…どうぞ本日、私は神の子とせられた、永遠の生命を与えられた、という確信をもってください。即ち、聖霊を受けて頂きたい。社会事業をやるとか、善行に励むというようなことは、キリスト教信者でなくてもやれます。要は、自分の罪の深さを示されてキリストの贖いの中にある。

「贖いの中に生きる」これが信者であります。行いというものは後からついてくるものです。信じなくても行いは出来ます。贖いを信じて、永遠の生命を信じて、与えられた自分の義務を果たす。ここにクリスチャンの特徴があります。牧師でも、会社人でも、大差はありません。人間は現れたところだけ見ます。あの人は偉い、善行をしている。しかし、神は行いを見ません。心を見ます。自分で善行をしていると思うようなことは善行ではありません。もしも、善行ありとすれば、自分のような罪深い者を神が永遠の生命を与え、生かして下さる、なんと有難いことであるか、という感謝であります。そういう者を信者といいます。問題は外側でなく、内側です。福音の祝福の内容は、神が我々に永遠の生命を与えて下さったことでもあります。

キリスト教は「御霊の宗教」

所詮、キリスト教は「御霊の宗教」であります。人間の理性を超えています。これが、人生に力を与える根源になります。理性で解釈できるものであれば、何もキリスト教に来る必要はありません。聖書に奇蹟の多いことはそういうことを暗示してしています。私は、キリスト教の信仰は奇跡であると思います。神の霊が我々に乗り移る。神が我々に下る。これは人間の力ではありません。神の恵みであります。

本日の中心は、やはり、キリストの十字架の贖いであります。最後の 13, 14 節はイエスの受難であります。受難の意義は、受難を信じて我々は救われるということであります。私は信じる能力、聞いて信じる、ということは万人に与えられていると思います。その能力は、人間の理性、尊い賜物であろうと思います。19 世紀以来、人間の理性については、非常に強調されてきました。しかし私は、本当の人間の値打ちというものは、むしろ「信じる」ことにあると思います。「信じる」ことは、一つの意志であります。真心、誠実、こういう尊い賜物が人類に与えられていることが、きっと 21 世紀に出て来ると信じています。

第10講・第1の感想——わたしは罪人であると信じる、そして、
十字架によって贖われて、永遠の生命を頂いたと信じる

「律法と約束」すなわち、律法は行為、道徳です。何々をすべしということ
です。この律法・道徳と、約束、すなわち神の恵みの約束、永遠の生命を与え
るという約束とは相反してはいません。22節でパウロが言った通り、律法の職
務は、本当に約束の意義を發揮せしめるためにある。律法・道徳があるから、
本当に「約束・福音」の意義が分かると思う。…十字架の贖いの本当の意義は、
律法・道徳があつて初めてわかる。自分の罪深いことが分かるから、罪の贖い
の意味が分かる。自分の罪の深いことが分からないとすれば、贖いはナンセン
スです。自分は罪人ではないのですからというのでは、イエス・キリストが十
字架について我々の罪を贖った、ああそうですか、と言って、関係のないこと
になります。

これが、「道徳と福音」との関係であります。我々は遺憾ながら、道徳と真剣
に取り組んだことが無い。人にはけしからんと言って責めますけれど、自分を
責める人はいない。自分には非常に寛大です。それだから、自分が罪人である
ことが分からない。我々は、自分が罪人であることが分からなくても、我々は
罪人であるということを信じたらよろしい。…わたしは罪人であると信じる、
そして、十字架によって贖われて、永遠の生命を頂いたと信じる。我々は、こ
の信仰で行くのであります。

第10講・第2の感想——神の約束、永遠の生命

キリスト教の中心は「神の約束」にあります。十字架の贖いを信じる者に永遠の生命を与えるという約束です。この約束を信じるということがキリスト教の中心です。この点が、日本の浄土真宗や浄土宗と符節を合わせると同じです。浄土宗では、阿弥陀仏の約束を信じることを他力真実の信心という。キリスト教においては、こういうことをはっきりいう先生は少ない。内村先生ぐらいでしょう。我々に永遠の生命があり、復活する生命があり、イエス・キリストの霊が我々と共に在る、と信じる時に、我々がこの世において如何なる苦しみ、悲しみがあっても、これに打ち勝つことができる、ということをパウロが説明しました。

第10講感想——ここでは「福音」を語る、神の計画を語る

以上、大体言いたいことを述べました。要するに、ルッターの言うとおりに、この福音の意義は、人間の理性に反します。誰でも律法・道徳なしに救われるのであれば、悪いことをしたらよいではないか、という誤解が起こり易い。これはパウロの時代にも、ルッターの時代にも、また現代にもあります。しかし、我々はそういうことを心配することは不要、他人のことを心配する必要はありません。

私は、こういう「福音」の極意はよその人たちには語りません。ここで、諸君に語るだけです。人は笑いますよ。先生は、少し頭がどうかしていると。しかし、ここでは「福音」を語ります。神の計画を語る。信じる人は信じて下さい。信じないでもよろしい。私は、信じてくれと、何も要求はしておりません。信じるか、信じないかは、君たちの勝手であります。

我々は、イエス・キリストを信じるその信仰によって神の子となる

我々は、キリストを信じる、その信仰によって神の子となり、律法・道徳にはよらない、ということでもあります。パウロが福音の意義についてこれ程はっきり解明しているところはありません。解明したのはパウロであります。そうですから、律法・道徳にしがみついているユダヤ人は、パウロを迫害しました。律法・道徳によらない。イエス・キリストを信じる信仰によって神の子とせらるる、ということはパウロの主張のみならず、新約聖書の主張であります。

ヨハネ伝第1章12節には、「彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。」と書かれています。これを福音という。この問題は、人間の考えと人間の理性とを越えています。これをキリスト教の信仰といいます。人間の理性によって理解できないことは真理ではないと主張するのは迷信であります。そういう者を科学万能の迷信者と呼びます。19世紀以来、人間はこの迷信に陥っています。そうですから、キリスト教の信仰が分からない。理性で分からないのですから、分からないのが当然であります。不可知であります。

ルッター「ガラテヤ書註解」（黒崎幸吉訳）から

〔第3章〕26, 28節についてのガラテヤ書註解書（黒崎幸吉訳）がありますので、その一部を拝読し、補足したいと思います。

「パウロは信仰の名教師として常にイエス・キリストにある処の「信仰によりて」「信仰に於いて」「信仰について」等の語を用いて居る。彼は、汝らが神の子たるは割礼を受けたるが故なりとか、又は律法を学びその行為をなしたるが故なりとは言わずして、イエス・キリストを信ずるによりて神の子たることを教えている。…パウロが明らかに「汝らは信仰によりてキリスト・イエスに有りて皆神の子たり」と言っているのは是である。換言すれば、たとえ汝は律法により苦しめられ、卑しめられ、殺さるるとも、律法は汝を義とすることが出来ず、また汝を神の子となす事が出来ない。これをなし得るものはただ信仰のみである。然らばいかなる信仰であるか、キリストを信じる信仰である。それ故にキリストにある信仰は我らを神の子となすのであって、律法が之をなすのではない。ヨハネも同一の事を証して言う「彼を受けし者には神の子となる権（ちから）を与え給えり（ヨハネ伝第1章12節、ロマ書第8章16, 17節）…」『それゆえに信仰とは、確かに目を離さずして、一物を見つめる事であって、その凝視の目的は罪と死とに打ち勝ち給ひ、義と救と永生との賜与者なるキリストのみである。これパウロがその書簡中にしばしば否ほとんど各行にイエス・キリストの名を呼び、またこれを示すの理由である。』

第3の感想——私の信仰と内村先生の信仰とは一つである

私は学生時代に内村鑑三先生の許で福音を聞きましたが、その当時は「靈交」という雑誌が発行されておりました。わたしは、それに投稿しまして、「私の信仰は内村先生の信仰と一つである」と書きました。学問その他のことにおいては先生と私は違うけれども、イエス・キリストの贖いを信じて、神の子となるのは同じである。黒崎幸吉先生がその文章を同じ雑誌に書かれました。私はその記事を記念として残してあります。即ち、内村先生は、私の信仰と内村先生の信仰とは一つであるということを読まれて、「よろしい、間違いない」と言われたのであります。信仰は一つであります。

第4の感想——ルターの序文

ルッターは、「ガラテヤ書註解」の序文の中で、「余は神の選器たる尊き使徒パウロの書簡に対し、かくの如き粗雑にして簡単なる註解を出版することを恥じざるを得ない」(ルーテルの自序・黒崎幸吉訳)と書きました。そして、このルーテルの註解は、キリスト教の歴史において、第1番の註解書となりました。ルッター自身、註解を粗雑にして簡略であると言いました。今の私の註解はなきに等しいものであります。